

〔書評〕

小原亨著『どん底に脈うつ意気地

——西鶴と近世文芸がとらえた賤民たち——

湯 浅 佳 子

本書は、身分社会が厳然として存在し、現在のような近代的ヒューマニズムの概念や発想、そして人権意識のない近世時代に、賤民として底辺身分層に生きた人々が、近世文芸作品にどのように活写されているかを追求した論文である。まず、本書の章段一覧をあげる。(一)には、扱われた作品名と作者、成立・刊年を示した。

第一章 西鶴がとらえた賤民たち

- 1 世はままならぬもの(『日本永代蔵』井原西鶴、貞享五(二六八八)刊)
- 2 大尽のなれの果て(『西鶴置土産』同、元禄六(一六八九三)刊)
- 3 貧が貧を搾取する(『西鶴織留』同、元禄七(一六九四)刊)

- 4 親子乞食、相棒の明暗(『本朝二十不孝』同、貞享三(二六八六)刊)
- 5 男が男に惚れる情 その一(『男色大鑑』同、貞享四(二六八七)刊)
- 6 男が男に惚れる情 その二(『男色大鑑』同、貞享四(二六八七)刊)
- 7 名妓の勇氣(『諸艶大鑑』同、貞享元(一六八四)刊)
- 8 乞食の誇り(『西鶴名残の友』同、元禄十二(一六九九)刊)

第二章 文人がとらえた賤民たち

- 1 都の錦の意気地(『元禄曾我物語』都の錦、元禄十五(二七〇二)刊)
- 2 室鳩巢の道德観(『駿台雜話』室鳩巢、寛延三(一七五〇)刊)
- 3 神沢杜口の人間の共感(『翁草』神沢杜口、明和・天明)

(二七四—八八) 成)

4 其角・春水の人権感覚(『閑窓瑣談』佐々木貞高(為永春水)、天保十二(一八四一) 成)

5 饅頭を買う乞食と障害者の乞食(『雲萍雜志』天保十四(一八四三) 刊)

6 非人の短歌 その一(『鬼園小説』曲亭馬琴他、文政八(一八二五) 成、『新著聞集』一雪、寛延二(一七四九) 刊)

7 非人の短歌 その二(『松屋叢話』小山田与清、文化十一(一八一四) 刊、『煙霞綺談』西村白鳥、安永二(一七七三) 刊)

第三章 随筆・雑話に著された賤民たち

1 弾左衛門の娘の計略(『世間咄風聞集』元禄九(一七五二) 六九六—一七〇二) 成)

2 乞食の情と義(『勸化一声電』竜正、宝暦十(一七六〇) 刊)

3 穢多盗人の義心(『半日閑話』大田南畝、明和五(一七六八) 文化十一(一八一四) 成)

4 長谷川平蔵の施し(『よしの冊子』水野為長。駒井乗邨、文化十二(一八一五) 序『驚宿雜記』の内)

5 お杉・お玉(『間の山夜話』岩出甫石、昭和十二(一九三七) 刊)

6 放蕩者を射とめる女非人の真心(『耳囊』根岸鎮衛、文

化十一(一八一四) 成)

7 女非人の嫁入り(『耳囊』)

第四章 ハンセン病はいかに扱われたか

1 馬琴の偏見性(『女護鳴恩愛俊寛』曲亭馬琴、文化十二(一八一五) 刊)

2 乙姫の愛の奇跡(『説経浄瑠璃』しんとく丸』正保五(一六四八) 刊)

右の一覧に示したように、本書は三部構成で、第一章では元禄以前の西鶴浮世草子作品、第二章は元禄期以降の浮世草子や随筆、第三章も同じく元禄期以降の作品だが、こちらは第二章よりも比較的世俗的な風聞集や仏教説話などを扱っている。そして第四部はハンセン氏病を扱った説経浄瑠璃と読本を取り上げる。このように本書は、近世の説話・逸話に登場する、最下層の身分の人々に焦点を当てた、いわば賤民の文学史ともいふべき論文集なのである。

本書では、原文に現代語訳と解説が付けられ、作品の成立過程や内容が分かりやすく紹介されている。次に、扱われた作品内容と論点についてまとめてみる。

第一章は、井原西鶴の浮世草子を取り上げている。まず「西鶴がとらえた賤民」として、『日本永代蔵』巻二の三「才覚を笠に着る大黒」・『西鶴置土産』巻一の三「偽もいひすゝして」・巻五の「女郎がよいといふ野郎がよいといふ」・『西鶴織留』巻一の

二「品玉とる種の松茸」の諸話を紹介する。そしてそれらの話には、当代の商業資本主義に失敗し都市の下層民に落ちた大商人のことや、下層民がより下層の貧者から銭を搾取するしたたかで非情な世界、阿波の大尽が豪遊の末破産し道頓堀の下層民の旦那寺に埋葬された話、勧進僧らの生きるための知恵が描かれているとする。その上で、そこには西鶴の厳しい現実認識に基づく没落者・墮落者・僧侶への批判、そして町人への実学の奨励といった教訓がうかがえるとする。

次に、『本朝二十不孝』巻四の一「善悪二つの車」について、最下層民に没落零落しても人間の精神を持つ者が最終的に救済される、勧善懲惡的な道理が世の中に貫かれているとし、人間性を保つことの大切さがメッセージとして示されているとする。また『男色大鑑』巻二の一「形見は式尺三寸」、巻三の五「色に見籠は山吹の盛」には、恋人への純心・献身的な愛情が描かれていたり、男色のためには最下層民に身分を落とすことさえ武士には屈辱・恥辱ではなかったことが示されているとする。『諸艶大鑑』巻五の四「夜の契は何じややら」では、最下層民の男にも同じく接すべきことを身を以て示した遊女金山の心意気が描かれているとする。『西鶴名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」では、溝川に小橋を建て渡り初めを行った貧民の老人や、笙を吹く男の言動から、人間としての誇りと自己の生き様への自信、自己の精神生活の充足を求める気高さが記されているとする。以上の西鶴浮世草子作品の五話から、氏は、底辺層に身を落としてはいても

人間としての尊厳を失っていない人々の生き様を見つめ、共感する西鶴の心情を読み取っている。

また『元禄曾我物語』の東海道亀山宿の敵討話について、『西鶴名残の友』巻四の四に基づいて作られた話で、最下層の身分の者にも人としての尊厳の心があることを新たに描いているとする。『駿台雑話』巻三、「二人の乞食」では、物乞いの中にも是非なく零落し不如意の生活を送る者にも義理を知る心が備わっていること、また『翁草』巻一九八「乞児屠兒喧嘩」では、義を重んじ理不尽を見過ごさず、金銭に潔癖で、町の年寄を諭す程の度量を持つ物乞いの話や、家督を捨て狂言芝居を楽しみ抜いた男の話に、隠者としての洒脱さを感じた、作者のまなざしを指摘する。『閑窓瑣談』巻一の四「奇才の賤妓」では、遊女の住居に見える風趣な生活意識や、客人と物乞いの間で交わされた和歌の風雅、そこに、貧者を卑しむことの誤りを説く作者の人間観があると指摘する。『雲津雜志』巻一には、袖乞いをして母親を捜し求めた娘の話や、身体不自由な男を車に乗せて引いて歩く家族らの話、仁愛と孝貞の教訓があるとする。『兎園小説』「乞児の賢」の、教養あつて尊厳を失わない貧者たちの話や、『新著聞集』「乞食自害して歌をのこす」の、悲哀の和歌を残し自害した物乞女に返歌した天子の話についても、風雅の観があるとする。さらに『松屋叢話』「煙霞綺談」の、巷間に伝わる物乞いの和歌・漢詩については、フィクションであり、底辺階層者の奇談・物語として後代に脚色・増幅されていったのではないかと分析する。氏は、

これらの話に、底辺社会にいる人々の人間としての志の崇高さが記されており、当代読者の共感を得ていたとする。また話の興味とともに教訓の要素も備わっているとする。

第三章、勸化本『勸化一声電』巻中の一「無量諸仏不悉咨磋商我名者」には、二人の物乞いの情と義のやりとりが描かれ、仏教的解釈とは別の、人心の有り様という世俗的解釈があるとする。『平日閑話』巻十五「盗賊の奇談」については、盗みをした物乞いには人間的交流への精神的欲望があり、物乞いを一般の罪人として扱った与力に物乞いが報恩として夢に現れた話と解釈する。『よしの冊子』二話は、広瀬伊八が農民との相互扶助の精神のうえに土蔵を建てた話、長谷川平蔵が物乞いに小銭を与え諸情報を得ていた話であることを指摘する。そして安土桃山期以降の文芸や芸能で様々に記された「お杉・お玉」説話について、当話を取録する『間の山夜話』では、差別に立ち向かう自立した信念を持った女芸人の凛々しさが描かれているとする。『耳囊』巻七「女の一心群を出し事」の、気丈な女性が男を求め苦難の長旅をする話からは、当代には物乞いに身をやつして制度から逃れ、旅をする者が実際にいたであろうことを推測する。巻二「茶事物語の事」では、風雅心を忘れず茶事に親しむ底辺層の男の話について、それが創作であるにしても、読者に爽快感を与える話であると解釈する。以上の諸話について、氏は「外見・身なりでは判断できない、彼らにも彼らなりの心があり生き様がある。そんなエピソードのいくつかを」紹介したと述べる（一二七頁）。

第四章は、近世文芸におけるハンセン氏病の登場人物の描かれ方についての考察である。ここでは近世初期・後期成立の二つの物語を取り上げている。まず、曲亭馬琴の読本『女護鳴恩愛俊寛』については、病に悪趣味な怪奇性・猟奇性が付与されていることから、馬琴の偏見の視点がぬぐえないと評する。しかしそれとは対照的に、説経浄瑠璃『しんとく丸』については、乙姫としんとく丸との物語が、人間にとつての真の愛情とは何かを訴えるものであり、病者に献身する行為の気高さもそこに説かれていると評価する。

以上のように、本書には、氏の二つの視点がうかがえる。一つ目は、作品に描かれる登場人物の言動から、尊厳をテーマにした人間ドラマを読み取ろうとする視点である。そしてそれらは、当代の読者のみならず、現代人にも共感できる物語としてあると説いている点である。二つ目は、それらの物語が、文芸的興味のものだけではなく、教訓話としても解釈できるとする点である。近世の説話や物語、随筆といった散文文芸には、文芸性だけではなく啓蒙的要素も備わっていることが、氏の論からも明らかになる。

「おわりに」によると、氏は一九九四年より公益社団法人部落問題研究所の文芸部会に参加し、機関誌『人権と部落問題』での「文芸の散歩道」の連載を十五年の間担当するなどの活動が続けてこられたという。そこでのテーマは、西鶴作品をはじめとする「近世文芸に著された近世賤民たち」であり、本書はその集大成

とのことである。

氏は二〇一五年三月に大阪府立高等学校教諭を「定年で退職なさったという。筆者は氏の仮名草子をはじめとする諸論考を拝読し学んでいた者であるが、このたびご縁があり、本書の書評を担当させていただくことになった。

なお、氏には、仮名草子や井原西鶴の浮世草子を扱った、文学と教育に関するご論考がある。例えば仮名草子『かなめいし』についての二つのご論考『「かなめいし」の文芸性―虚構化の方法をめぐる―』（『立命館文学』第五九二号、二〇〇六年二月）、『「かなめいし」の文芸方法―中・下巻を中心に―意の創作意図を探る―』（『日本文藝學』第四十八号、二〇一二年三月）は、作品の虚構性・娯楽性・啓蒙性に言及し、仮名草子の文芸的特質を明らかにしたものである。また、西鶴作品の教材研究「西鶴浮世草子「世界の借家大将」の教材研究―指導書からの深化をめざして―」（『論究日本文學』第一〇三号、二〇一五年十二月）では、高等学校教育における『日本永代蔵』の指導法について論じている。

今回、本書をとおして、人間の尊厳に関わる視点から作品を読み解くという新たな近世文芸研究の方法を知った。不勉強で言葉足らずの点多かったかもしれないが、何とぞご容赦願いたい。

（部落問題研究所、一四一頁、二〇一五年三月、本体価格一二〇〇円）

（ゆあさ・よしこ 東京学芸大学）

小原亨著『どん底に脈うつ意気地―西鶴と近世文芸がとらえた賤民たち―』